



Title	内田繁とホテル《イル・パラッツォ》：アルド・ロッシとのコラボレーションがもたらしたもの
Author(s)	橋本, 啓子
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 112-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103736
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

内田繁とホテル《イル・パラッツォ》

— アルド・ロッシとのコラボレーションがもたらしたもの

橋本 啓子 近畿大学

はじめに

内田繁（1943 年生～2016 年没）は、倉俣史朗らとともに 1970 年代以降の日本のインテリアおよび家具・プロダクトのデザインを牽引したデザイナーである。本発表では、内田が 1980 年代後半にアート・ディレクションとインテリア・デザインを手がけ、1989 年 12 月に福岡に開業した《ホテル イル・パラッツォ》が内田にもたらした刺激について検証する。

《ホテル イル・パラッツォ》の建築設計を担当したのはアルド・ロッシ（1931 年生～1997 年没）であり、この高名なイタリア人建築家とのコラボレーションが、内田に色彩への関心や、線から面への移行などをもたらしたことは、内田自身の著述（『家具の本』晶文社、2001 年）と彼の家具デザインに見て取れる。ロッシとの交流はまた、内田自身に「デザイナーとして何を探求すべきか」ということも考えさせた。本発表では、内田が《ホテル イル・パラッツォ》のプロジェクトから得たこれらの刺激の具体的な様相とその意義を、内田による著述、および内田のアシスタントを長年務め、現在、内田デザイン研究所社長である長谷部匡に発表者が 2025 年 2 月 21 日に行ったインタビューをもとに検証・考察する。

ホテル イル・パラッツォ誕生の経緯

《ホテル イル・パラッツォ》のプロジェクトは、1986 年に株式会社ジャスマックの社長、葛和満博が福岡市春吉地区の開発について内田繁に相談をしたことから始まった。ホテルの建設は当初

からの決定事項だったが、葛和は単体のビル建設に終始せず、都市計画としての地区開発を望んでいた。プロジェクトのアートディレクターに就任した内田は、地区のイメージ一新に不可欠な力強い建築を設計でき、都市と建築との関係にも通じているロッシに声をかける。

1987 年 3 月に来日したロッシがまず行ったのは敷地の周辺を内田とともに隈なく歩くことであり、内田曰く、ロッシは歩きながら街に残された断片（フィラメンテ）の臭いをかぎ、それらに潜む歴史的な記憶を掘り起こしていた（『「門司港ホテル」アルド・ロッシ 内田繁』六耀社、1998 年）。とりわけロッシが関心を寄せたのは、川と敷地の関係と福岡の路地や屋台であり、京都を訪れたときには西本願寺に着目したと長谷部は回想する。

ホテル イル・パラッツォのデザイン

1987 年 5 月にロッシは再び来日、第一案として提示したドローイングは、三層のコーニスを抱く赤い組積壁を列柱が垂直に走り、その列柱を緑色のリントルが水平方向に分断する高層ホテルを描いたものだった。イタリアの古典主義建築を極限まで単純化したようなファサード・デザインに、それ以前のロッシ建築が特徴とする原初的な幾何学形の構成を期待していた内田は非常に驚いたという（『INAX REPORT』〔株式会社 INAX 発行の季刊誌〕No. 159, 2004 年 6 月 15 日）。ファサードに一切、窓がないことも日本側スタッフを驚かせた。その理由をロッシは明らかにしていないが、日本側では現代日本の劣悪な景観を視界から排除す

るためではないか等、開店後もさまざまな憶測を招いた。

しかしながら、少なくともロッシ自身にとってこのファサードはきわめて日本的なデザインだった。水平方向に走る緑色のリンテルは、彼が日本の伝統建築に見出した「水平ラインが強い」という特徴を表現したという（『INAX REPORT』No. 159）。また、ロッシはファサードのドローイングと同時に那珂川を含めた春吉地区全体にホテルを配したドローイングも提示しており、当初から地区開発を念頭に置いていたことは明らかだった。1987年秋には、ホテルの左右に路地と別棟を配した基本設計が完成する。別棟にはロッシ、エットレ・ソットサス、ガエターノ・ペッシェ、倉俣史朗が各々設計した4つのバーが入った。1988年4月に建設着工、1989年11月に竣工、12月にグランドオープンを迎える。完成した《ホテル イル・パラッツォ》は、内田の狙いどおり、そのモニュメンタルなファサードが瞬間に地区の顔となり、デザインの持てる力が証明された。

ホテル イル・パラッツォのインテリアと家具

内田は、《ホテル イル・パラッツォ》は小さなホテルゆえに、外部と内部とが共通したイメージを打ち出すべきだと考えていた。内田と三橋いく代が手がけたインテリアは、とりわけ2階のロビー階が、フロアプランや素材選定、色彩計画の点でまさに外部のデザインと呼応する。《ホテル イル・パラッツォ》は南北に走る中央の軸線にある10本の柱が各フロアを串刺しにする左右対称の構造であり、建物の外部も広場のある基壇の左右に別棟を配する。内田と三橋は、柱で幾何学的なアーチをつくり、広場の階段を上って建物内部に入った客がそのまま真っすぐ歩き続けて、ロビーへ、その先のイタリアンレストランとバーへと向かうプランとした。床は、緑色のテラゾーと赤のカリン材のストライプ柄を連続させ、赤のカリン材は内壁、緑色のテラゾーはテーブルにおいても

繰り返されることで、外部と内部とを共通の造形言語で統一した。見事な統一に、インテリアもロッシが手がけたと勘違いした人もいたほどだった。

家具はすべて内田ひとりがデザインしており、それまでの内田の家具を特徴づけていた線的な要素が消えて、面や立体、色による構成が際立つのはロッシの影響も大きかったと推測される。木製の床置き時計の《ディア・モリス》（1989年）は、長い矩形の脚とそれがつくる矩形の開口部の組合せが、ロッシによるガララテーゼの集合住宅（1969–1973年）の柱廊を想わせる。また、ロビーの《ベルデスク》（1989年）や客室の《オーガストチェア》（1989年）ではネジのフォルムがアクセントとなっており、ポップアートの的な雰囲気を醸している。

おわりに ― ロッシが内田にもたらしたもの

長谷部によれば、内田は、ロッシと出会ってから2つのことを解放されたと言っていたという。ひとつは色彩からの解放であり、《ホテル イル・パラッツォ》の内田の家具はそれを物語る。もうひとつは日本の伝統からの解放である。内田によれば、ロッシの建築には人間や都市の物語、地域や民族の物語など、さまざまな物語が入っている。一見イタリア風の《ホテル イル・パラッツォ》も日本の水平ラインを表現したリンテルや、東洋と西洋とが会合するイランで産出された赤石トラバーチンの使用等、土地固有の物語を含んでいる。内田はロッシの「物語」と出会ったことで、自分の中でずっと押し隠していた日本文化に素直に入り込むことができたと述べ、以前から日本文化のアーキタイプとみなしていた茶室のデザインを1989年から試み始める（『家具の本』）。1993年の《受庵》《想庵》《行庵》の3つの折り畳める茶室は、建築、室内、家具のすべてを併せ持つ茶室の本質的な意味を問うものだった。ロッシがもたらしてくれた貴重な問いは、その後の内田のデザインの基底を成したのである。